令和８年度 第1回 糸島市文化芸術推進ミーティング 会議録

日時：令和８年９月３日（木）14:00～
場所：糸島市役所３階 会議室３０１

出席者
アドバイザー：A、B、C、D、E、F
事務局：A、B、C、D

〇開会
〇文化芸術推進アドバイザー委嘱
〇出席者紹介
〇あいさつ
事務局 A：昨年度文化芸術推進基本計画を策定（５年間)。本日のミーティングは、計画に位置付けられている。策定して終わりではなく、実践的効果的な取り組みをしていかなければならない。
限られたリソースの中で、できることを検証しながらやっていく。今年度の事業、次年度の事業の案について、皆様からのご助言をいただきたい。ぜひこの会議が建設的なものとなってほしい。

〇糸島市文化芸術推進基本計画と糸島市文化芸術推進ミーティングの概要説明
（事務局 C：制度、スケジュールについて説明。）
〇糸島市文化芸術推進事業(アートの森づくり)令和９年度事業について
(1)アートの森づくり事業 令和８年度事業経過
（事務局 C：事業の説明。）

■質疑応答
アドバイザーC：要綱では１０人以内、今日６人。途中で加わるケース等あり得るのか。
事務局 A：あり得る。計画上では学識経験者としているが、その時々で追加で市民目線・受益者側の方をお呼びすることもあり得る。
アドバイザーC：アドバイザーとして委嘱するのか、オブザーバーとしてその時だけ来てもらう等なのか。
事務局 A：オブザーバーという形になるのではないかと考える。

アドバイザーC：去年計画策定時、事務局側で関わった。今年度、市の内部の合意形成（予算等）と計画にズレはないか。
元々は目標と施策。３つのアプローチはあと付け的。整理した方がすっきりする。
基本目標と施策のどれとそれぞれ結びつくのか、をもっとしっかりするのが基本では。
事務局 A：予算取りの手段としてアプローチという見せ方をとったのはその通り。ただ事務局としても施策との関係はしっかり意識している。

アドバイザーA：伊都文・美術館、ハード面は現在進行中で好評。
ソフト面について。アーティスト派遣・公募展関係、外から呼ぶ以外にも、地域内での交流も深めてほしい。今現在、美術協会も公募展を行っている。単発の支援の形で考えているのか。長期的に行っている公募展を支援続けていくのか。読み取りづらい。長続きする形が望ましい。
事務局 C：制度の趣旨として重点対象の設定。地域内のアーティストは含みつつも、糸島にない多様な文化・アーティストを呼び込むことを主眼としている。
事務局 A：市が主催して展示会を行うリソースの限界はある。一方で、チャレンジの機会が糸島にあることは大事。その両方を両立できる方法を模索。なるべく長く続けていくために、民間主導での動きをサポートする仕組みとして考えたもの。既存の事業・新たな事業両方で、今後も継続していけるよう努力したい。
アドバイザーE：県知事賞や大臣賞等はものすごく細かい審査がある。手続きも大変。糸島市長賞を、今日明日手を挙げたものにすぐ設置する、というものは少し心配。市長賞の重みを大事にした方がよいと思う。何回続けて実績を積み重ねたもので、ようやく、という形が一つある。
アドバイザーC：（作品の審査のほか、）公募を行う民間事業者の審査をする、という２つ目のレイヤーがある。なぜコンペにこだわるのか。コンペである必要性は。
アドバイザーD：現状支援事業始まる前はそのような公募展どれくらいあったのか。
アドバイザーA：美術協会でやっていた年一回の一つだけ。賞状を渡すくらいの表彰。
この３年５年予算があるうちは副賞できるが、そのあとなくなる、という形だと困る。
アドバイザーC：美術協会以外の民間をどこまでとするか。営利、宗教等の判断も絡むリスクがある。予算も絡むので主催者への支援をする中で唐突に終る形になるとどうか。
アドバイザーB：営利・広告のための側面を判断するのも難しさがある。
アドバイザーD：「市長賞ありますよ」というだけで市民の方が手をあげてくれるか。あと市民の扱いをどうするか。
アドバイザーA：予算を時限立法的にするより、なるべく長続きするような支援の方がベター。
アドバイザーC：同意。計画をつくった以上は、単年度で終わるものでなく５年間やるだけの継続性をイメージしたものにしてほしい。

アドバイザーC：アーティスト派遣に関して。誰がアーティストの質を峻別するのか。わたしもこれまで、不確かなアーティストのケースも多く知っている。ある程度目利きできる人がいるならいいが、どうするのか。
事務局 A：アーティスト側ではなく、呼ぶ方が申請主体となるようにしている。
アドバイザーC：その呼ぶ方の審査はどうやるのか。
事務局 A：現状いくつか条件をつけて判断できるよう努めている。
アドバイザーC：ごくごく身内でやる場合でも申請できてしまう。心配。
事務局 C：完全な回答にはなっていないが、規模に縛りをかけてそれを除外しようとしている。
事務局 A：審査時の重みづけで学校・校区等に比重がかかるようにしている。
アドバイザーC：アーティストの資質、呼ぶ側の信頼性を測るのに、現状の仕組みでは市役所内でやる形。業界的なカンで不確かさが見えることも多い。
アドバイザーB：質の部分どうするのかは私も心配。行政区のイベント等に呼ばれていた、必ずしもアーティストと呼べるか分からないゲストの謝礼に補助金を使えるようになった、と解釈さ

れる懸念もある。
目的の部分を考えるなら、手続き部分の厳しさは必要と思う。

アドバイザーD：既存の者も含めつつも、新しい挑戦により支援できる形を。その時の目利きが重要。

アドバイザーB：これまで難しかったことが、補助金が出来たから実現できた、という形が補助金制度創設の目的だと考えられるので、そういった事例を増やせる仕組みを考える必要がある。

アドバイザーE：行政区の祭りとかも可なら「我も我も」と大変なことになりかねない。
任意団体でも「過去実績」を持っているところは支援できるのがよい。（NPO でないことから補助を受けられれないケースがあるため。）
呼ぶ方の立場としても、外注してよく分からない人がくるのは心配。市の登録アーティストに補助金が出る、といった形だと安心できる。

アドバイザーC：間に入ってコーディネート（アーティスト側と現場の調整）する人の資質が重要。

アドバイザーD：今年はもう市のホームページにも出ているし、今から制度変更は難しいのでは。

事務局 A：審査は行うのでその段階で考慮することはできる。

アドバイザーC：関係構築できている同士なら大丈夫だが、そうでない場合は事故が起こり得る。

アドバイザーB：年 3 回実施事業の現場に立ち会う、事前ミーティングをするなどの仕組みを作ることでトラブル防止に役立てられるのでは。

事務局 A：質の担保の必要性についてはしっかり認識した。今後の取組に注意しておきたい。

アドバイザーF：伊都文でもよく自主事業でどうですか、という売り込み多く来る。何百万と予算係ることも多い。

アドバイザーE：とりあえず令和 8 年度に進める中で出てくる課題を、令和 9 年度以降に反映させていく形になるのでは。

アドバイザーC：今年度の申請についてもリサーチをしておく方がいい。少し危ない気がする。
実際やってみてフィードバックが欲しい。例えば、呼んだ学校の先生とかに聞き取りをしてみるなどが考えられる。「学校の先生の仕事を増やしていることにつながっていないか」についての意見があれば、そのためのコーディネーターの重要性が検証できる。

アドバイザーB：今年度は、しっかりそのあたりを調査分析して来年度に生かせる形に。

アドバイザーC：要綱等ルールにできるものと、そうでない部分を補う合議の両方で審査できるのが理想。

アドバイザーC：計画策定記念事業について。今年度はやったとして、この先、市民の鑑賞機会は引き続き蓄積されて行かないと。最初はニーズが少ないがこれから続けていく中で成長していく姿を見せることが大切。事業の継続性をできるだけ大事にする方がよい。愛好家がいないわけではないが、定着させ増やしていくためには情報届ける先が必要。「お客さん」とつながる（DM リスト等）こと等の有用性がある。

アドバイザーA：非常に同感。実際に行って、非常にいいのにお客さん少なかったの残念。継続性、PR がもっと必要である。

アドバイザーB：きっかけづくり・動機づけの視点が必要。素晴らしいイベントをやれば市民が来てくれるかというとそうではない。はじめてのクラシック等レクチャーを組み込む、そういうシリーズを継続することでハードル・間口を広げることにつながる。

アドバイザーD：令和９年度以降も記念事業は継続しない（予算化しない）のであれば、継続の観点ではまた別の話となる。

(2)アートの森づくり事業　令和9年度事業案

（事務局 C：令和 9 年度事業の説明）

■質疑応答

アドバイザーC：中間支援組織の準備を令和 9 年度に行うとあるが、誰が準備するのか。予算 0 で行うのか。

前に進むのかイメージがわかない。ボランティアの方も、市の主催事業が何を想定しているのかピンと来ない。

ポータルサイトも設置した後のハンドリングも市がやるのか。広報とか PR に関しても市がやるのは限界があると思う。スピード感のある情報発信のためにはディレクターになる人が必要。市だとそれが難しいと思う。

事務局 A：機動的な情報発信は将来的に中間支援組織に担っていただくことを想定している。

アドバイザーE：中間支援組織立ち上げについては、観光協会のようなものになるのか。ポータルサイトもランニングコストがかかる。しっかりした組織に委託して行う形でないと続かない。

事務局 A：調査研究・中間支援組織立ち上げが進まないうちにサイトを構築しても手戻り等につながるのは、確かにご指摘のとおりである。

アドバイザーE：今はホームページをつくればいい時代ではなくなっている、SNS 含め情報の発信し続けることが必須では。

アドバイザーB：両方が必要である。アーカイブ機能もあった方がよい。

アドバイザーB：糸島市がアート事業に取り組んでいることを示すシンボリックなマークがあればよいのでは。市が応援しています、ということがわかるアイコンがあれば、市の姿勢をアピールする手段になる。「マークがあればコミュニティセンターにチラシが置ける」等のメリット創出等が考えられる。

○閉会

（事務局 B：次回についてはまた調整連絡の旨伝達。）